日進の木・キンモクセイ物語

「ライトツリー」に見守られ 五色園の白坂さん家族

「何十年前のことでしょう。主人と庭に植えるとき、石ころだらけで掘るのが大変でした」

五色園に住む白坂惠さん（63）は、自宅の庭の両端に育った2本のキンモクセイを眺め、穏やかな表情を浮かべた。

木は、長女・惠美さん（35）と長男・牧人さん（32）が相野山小学校に入学した当時、日進町から贈られた記念樹だ。次男・大介さん（30）のときは記念樹はなかった。昭和の末から平成が始まった頃の話で、それぞれ樹齢29年、26年にもなる。

「毎年いい香りが秋の訪れを教えてくれる。枝を切ってもめげないし、セミの抜け殻もたくさんあって、元気をもらっています」

白坂さんは、仕事で名古屋市昭和区の南山教会で働いていた20代のとき、夫のマーク・C・ライトさんと出会い国際結婚した。緑の多い自然環境にひかれ、五色園の地に引っ越してきた。当時の住所「さくら台」という響きも心地良かった。近所にはまだ数軒の家しかなかったが、新しい街の中に「お月見どろぼうの風習があること知って感動した」と振り返る。

小学校で受け取った木は、長さが1メートル近く、幹は指の太さしかない程だった。引っ越して間もない頃で、記念樹がシンボルツリーとなった。3年後には、牧人さんの記念樹を植えた。

「子どもたちが地域で伸び伸びと育ってほしい」と願いを込めた。家庭教育推進委員会や子ども会の行事に、家族ぐるみで参加した思い出がよみがえる。いつしか、きょうだいの木の大きさが逆転し、牧人さんの木は、樹高3メートル程にまで成長した。

3人の子どもたちは、いずれも米国の大学に入学し、社会に巣立った。惠美さんは米国で看護師になって結婚し、子宝に恵まれた。牧人さんは仙台市でスポーツトレーナーとして活躍し、2年前に結婚。大介さんは青森県の米軍基地で働いている。離れていても「子どもたちにとって、五色園は永遠の古里。ここでの生活を礎に羽ばたいてほしい」と祈っている。

夫・ライトさんは南山大学外国語学部の准教授を務め、多くの学生に慕われた。だが、5年前に59歳の若さで亡くなった。白坂さんは、一人になっても、決して一人ではない。現在、福祉の仕事に携わり、多くの人たちを応援している。

キンモクセイのオレンジ色の花がもうすぐ咲き始める。白坂さんは言う。「家族の原点は我が家のこの『ライトツリー』。これからも守り神として見守ってください」

木には、家族の思い出と愛情がぎっしりと詰まっている。（つづく）

市の木・キンモクセイ

昭和49年当時の日進町は「町の木」を選ぼうと住民投票を行い、キンモクセイに決まった。緑を増やそうと、昭和後期に町では婚姻届や転入届を出した人や、入園・入学式に、キンモクセイの苗木を記念樹として贈っていた。

キンモクセイに関する情報をお待ちしています。秘書広報課（0561-73-3149）

⬆3メートル程に成長した牧人さんの木を紹介する白坂さん

事務局長を務める高平和彦さん（83）は「南ケ丘には経験豊富な人材がありコミュニティーの形ができています。そのなかに中高年の人にも参加していただければもっと勢いが付く」と力を込める。

一方、区長経験者らによる児童の見守り活動も盛んで8年以上続く。2年前に引っ越してきた子ども会会長の村上陽子さん（36）は「皆さんがとにかく元気で気さくです。子どもたちを見守っていただきありがたい」とすっかり地域に溶け込んでいる。

老人会の南ケ丘喜之和会の会員数は191人と増え、宮澤繁雄会長（76）は「心身共に健康な人がとても多い」と喜ぶ一方、「集会所が手狭になっている問題もありますし、大型バスがあればもっと出掛けやすくなる」と、備えの必要性を訴える。

5年先、10年先―、地域の三世代の人たちが支え合って暮らす「ありたい姿」に向かって、高平さんらの奮闘は続く。

⬆和気あいあいとした雰囲気に包まれた大会